

軍事・歴史・政治・経済研究紙

本紙の年間購読は本体3,000円+税です。

一枚舌で国際社会を世渡りする日本の利己主義

文明の進化と戦争の関係

戦争は人類の頭上に文明を齎し、科学技術を発達させた。現代の二十一世紀は、この恩恵に預かっていると言える。そして科学技術の進歩は、最先端技術に見る様々な次元のものを作り出し、兵器は半世紀前とは異なる進化を遂げた。こうした進化の中に、日本人の多くは間接的にその恩恵に預かり、更に組織化されたものになった。

そして日本を考えた時、この国には不思議な二つの事は起っている。一つは兵器の輸出禁止と、もう一つは外国からの兵器の輸入の容認である。これを欧米の学者達は日本の利己主義を揚げ、日本のもつ不思議な形体の国家を手厳しく糾弾する。

現在、自衛隊は陸海空を合わせて現役総兵力は二十四万人である。これは韓国軍の六十万人、台湾軍の四十五万人より遙かに少ない数字である。その上に兵器輸出も全面的に禁止されているから、兵器市場の視野や最先端兵器を評価する思考が極めて狭く、これが原因でアメリカから高価な兵器を購入すると言つ不合理を押し付けられているのである。

かつて一九五〇年代、兵器国産化政策は、次ぎのような大義名分があった。その第一は、輸入やライセンス生産に頼る場合、外国は自らの利益上、最高度ならびに最先端の科学技術は他国には渡さないと考えられていた。したがってそれ等を入手する事は不可能であると信じられていた。

その第二は、兵器輸入に頼ると、戦時に遭遇した場合その輸入ルートが遮断され、不利な態勢に陥るのではないかと考えられた。更には、平時においても、外交上兵器が引き材料にされる恐れがあり、法外な値段で売り付けられるのではないかと懸念があった。その第三は、兵器の自主開発と

生産により、技術の創造性と技術的な水準が促せるのではないかと考えられた。その第四は、兵器生産能力こそが、有力な戦争抑止力になるのではないかと考えられた。

こうした半世紀前の延長上に日本はあり、日本と似た境遇にあるのが、国際社会で四面楚歌を全うするイスラエルである。こうした現実に対し、欧米の学者達(アメリカ・アレキサンダー博士ら)は、日本もイスラエルも利己主義であると解釈している。

現実問題として、潜在的驚異であるアラブに兵器輸入が妨害され、危機を感じる実例がいくつも存在している。一方、イスラエルはいくら自国で努力しても、主要な兵器全部を国産化する事は不可能である。こうした事に対し、イスラエル空軍は、「コストが高み、信頼度も劣る国産のラビ戦闘機の開発を止めて、F16の輸入を増やすべきであると主張しているのである。

この構図は、日本の現状に酷似した国家体制であり、ただ日本とイスラエルの異なるところは、自稱平和憲法と自負する輸出を禁止する一方、輸入を容認すると言つ不思議な構図を作り出し、全く筋の通らぬ政策が依然続けられているのである。こうした中、日本は兵器輸出の禁止政策の中で、販路が小規模に縮められ、この縮小世帯の中の自衛隊に限り、許されるとしている。

したがって武器調達を行政側から見て、画期的な発想が期待できる事は絶望的であり、武器購入に関して言えば、大幅なコストダウンは期待するのが無理な状態になっている。また本来ならば、時代に合わせ、それに併せて、現自衛隊における兵器取得の合理化を追求しなければならぬ。しかし日本社会の現実には兵器輸入等を含めて、海外からの依存に頼り、その中心は

石油や食糧であり、これ等を断ち切られれば、一気に日本は干上つてしまふ。兵器も同じだ。

一方こうした声を受けて、石油と食糧を確保することこそ、日本の安全保障の要であり、これを確保できる範囲以内の防衛力のみで充分とする考え方があつた。

しかし歴史を振り返って、「戦争史」を見ると、原油と食糧はあらゆる程度の備蓄が可能であり、浪費を抑制しつつ国際間の融通に頼るなどの短期間の持久策が可能である。また食糧や石油が断たれて、

日本が干上るまでにはある程度の時間が掛かる。ところが先端技術兵器は僅かな部品が抜け落ちて、その兵器は用を為さないものである。武器は備蓄しておいても、時代とともに旧式化の憂き目を免れない。外国の脅威に屈しない為には、短期的な視点をもって逐次生産を行ってそれを使いこなす訓練が必要であり、防衛費を効率的に使用する為には、量と質とともに満足の行く兵器システムの確率が実現しなければ、軍事バランスの拮抗は保てないであろう。

今日の自衛隊の実情は、バランスを欠いた税金の無駄遣いと言つ現実が見逃すことが出来ず、戦闘重視で、その戦闘を可能にする後

方支援の兵站部を軽視している点にある。これは明治維新以降の日本特有の「兵站部無視」の軍事観で、常にこうした事を後回しにしてきた。先の大戦においても、これが原因で日本は敗れたのではないかと。防衛問題を取り上げる場合、防衛費に含まれる総額のみが問題となり、武器弾薬の備蓄については余り語られない事が多い。また国民の多くは、実際に防衛費が度のように遣われているか、知ろつとしないのが実情である。

今日の自衛隊の現状を見て見入ると、見た目は派手だが、多くは正面装備ばかりであり、消耗品の弾薬やミサイルの弾頭は貴重品扱いで訓練で思う存分使用する

しかしイスラエル側からの見方はこれを異なる。イスラエル国民は彼等を「フラックに通じた獣」と見做し、騎士達の勇氣と熱意は優れていたが、それ以外は何もないと見ていた。これは肉食獣が草食動物を襲う構図に酷似して、獐猛な攻撃性と、力の面では優れていたが、それ以外は何もなかつた。ルーヴル美術館には、ドラク

聖地奪回と宗教戦争

(その二十八)

イオンド大学教授 曾川和翁

戦いに際し、死を恐れない者程、強い者はないのである。

この事は、時の権力の支配者が宗教団体を弾圧する時、どの時代も、何処の地域でも、非常に手こずる事で良く分かる。一方、アラビア半島で生まれた者でない異教徒でも、改宗してイスラム教に入信し、聖戦に参加すれば、イスラムの民として、戦利品に与れるとされているのである。

「聖地奪回」とは真つ赤な嘘。一般に十字軍と云うと、歴史からも窺える通り、「聖地奪回」が目的であるように思われているが、これはキリスト教側からの情報に基づく言い分であり、多くは瞞しであり、幻想であつた。

イスラム教側から見れば、聖地奪回とは程遠く、殺人と掠奪であり、「十字軍」という呼び名自体、ヨーロッパでの同戦争の末期頃に、十字軍と云う言葉が出て来たのであつて、初期には「エルサレム行脚」とか「聖墓詣」等と呼ばれ、イスラム側はキリスト教徒を「フランク」(ゲルマン民族の意味)と呼んだり、「掠奪者」「侵略



エルサレムを包囲するフランク軍

目には余るものがあった。一〇九八年、シリア北部の町マアツラでは、イスラム教徒を大鍋に入れて煮殺したり、子供達を串刺しにして焼いて食べたという記録までがある。

その目的は「聖地奪回」とは程遠く、虐殺と掠奪の限りを尽くしたというのが十字軍の実態であつた。それぞれの宗教では、「人を殺せ」とは決して教えてはいない。ところが異教徒になると、これを平気で行うというのが、極めて不可解なことであつた。神に祈る手も、人を殺す手も、同じ手を以て行っているのである。こうしたことは同じキリスト教とでありながら、双方が近親憎悪の世界にある、アラビア半島紛争を見れば一目瞭然である。異教徒ならまだしも、新教と旧教の違いで起こる、他派であるという理由で、他派の一線を越えて、ひたすら残酷性が出てくるのは何とも不可解な限りである。

イスラム教徒の間で聖戦の意識が高まるにつれ、逆に十字軍の間ではイスラム世界に対する聖戦の意識が薄れて行った。

当時、イスラム圏では、ヨーロッパに比べて文化水準が上がつていたので、まさにこうした十字軍の侵略を野獣の侵略と看做したのである。事実、十字軍の殺人と掠奪は

ことが出来ないものである。もはやこつなれば、消耗品の弾薬が無い以上、高価な武器を並び立てても、単にこれ等の兵器はスクラップ同然になつてしまふのである。こうした背景には、政治ばかりは優先して、現場で作戦を実行する自衛官の正論が無視されていると言つ現実がある。そして政府は無駄遣いばかりして、国民の血税をドブに捨てていると言つ実情が免れない。

ちなみにイギリスやフランスでは、国産兵器の多くを第三世界への輸出に振り向けているのにも係わらず、国際社会での批判が少ないうのに対し、日本では兵器輸出禁止政策は殆ど評価された試しがないのである。(独眼電)

歴史を工学的に科学する

〒802-0985

北九州市小倉南区志井6丁目11-13

(尚道館ビル2F)

九州科学技術研究所

093(962)7802 FAX093(961)8224

Eメール: science@daitouryu.com



九州科学技術研究所

Kyushu technology Institute

九州科学技術研究所 URL

http://www3.ocn.ne.jp/saigouha/

大東流霊的食養道HP

www.daitouryu.com/syokuyou/

癒しの杜の会HP

www.daitouryu.com/iyashi/